日本人母子における愛着の世代間伝達

数井みゆき¹ 遠藤利彦² 田中亜希子³ 坂上裕子⁴ 菅沼真樹⁵

本研究では現在の親の愛着とそれが子の愛着にどのように影響を及ぼしているのかという愛着の世代間伝達を日本人母子において検討することが目的である。50組の母親と幼児に対して、母親には成人愛着面接 (AAI) から愛着表象を、子どもには愛着Qセット法 (AQS) により愛着行動を測定した。その結果、自律・安定型の母親の子どもは、その他の不安定型の母親の子どもよりも、愛着安定性が高いことと、相互作用や情動制御において、ポジティブな傾向が高いことがわかった。また特に、未解決型の母親の子は、他のどのタイプの母親の子よりも安定性得点が低く混乱した様子が、家庭における日常的状況において観察された。ただし、愛着軽視型ととらわれ型の母親の子どもは、安定型と未解決型の母親の子どもの間に位置する以外、この両者間での差異は認められなかった。愛着の世代間伝達が非欧米圏において、実証的に検証されたことは初めてであり本研究の意義は大きいだろう。しかし、さらなる問題点として、AAI や AQS の測定法としての課題と母子関係以外における社会文化的文脈の愛着形成への影響という課題の検討も今後必要であろう。

キーワード：愛着の世代間伝達、アダルトアタッチメントインタビュー、愛着Qセット法、内的作業モデル、愛着行動

問 題

青年期・成人期の実証的な愛着研究が、本格的に問われるようになった契機として、Main, Kaplan & Cassidy (1985) の“表象レベルの愛着”に関する論考が挙げられるだろう。彼女らは、元々 Bowlby 理論の中核概念としてありながら、不当にも長く等閑視されてきた“内的作業モデル” (Internal Working Model: 以下 IWM) 概念に再び光を当て、その特質を把握するための体系的な手法、“成人愛着面接” (Adult Attachment Interview: 以下 AAI) (George, Kaplan & Main, 1996; Main & Goldwyn, 1998) を開発することによって、具体的行動としてではない成人の表象レベルの愛着を実証的に解明する道を切り拓いた。

Bowlby (1969, 1973, 1980) の仮定によれば、子どもは愛着対象との日々の具体的相互作用を通して、徐々に、愛着対象への近接可能性および愛着対象の情緒的応答性等に関する主観的確信、自己と他者の関係性全般に関する一般化された表象、すなわち IWM を形成する

という。いったんこの IWM が固まり始めると、子どもはこれを1つのテンプレートとして様々な対人関係に適用し始める。愛着対象と自身の関係スタイルを基盤に、新たに遭遇する他者のふるまいを予測・解釈し、自分自身の行動のプランニングを行うようになる。結果的に、愛着対象と自身との関係に近似したスタイルが再生産されることになり、それを通じてまた、個人はその IWM をさらに強固にしていくことになり、ひいては人格の同一性が保持されることになると仮定していた (詳細は遠藤, 1992, 1993)。

では IWM は成人期において、具体的にどのように測定され、符号化されるのだろうか。AAI は、分離や喪失を含む過去の愛着経験およびその現在に対する影響などを問う半構造化された面接であり、そこでの語りは、逐語的なトランスクリプトとしてまとめられる。そのコーディングの最も重要な特質は、語りに現れる“過去の諸事象”ではなく、“現在の心的状態”に焦点を当てるということであり、語りの“内容”よりもその“形式”や“構造”を重く見ることである (Hesse, 1999)。

Strange Situation Procedure (以下 SSP, Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978) において、乳児の愛着行動の個人差は、一般的に“現にその場に居合わせる”愛着対象への近接可能性とその対象に対する情緒的態度

¹ 茨城大学教育学部 miyuki@mito.ipc.ibaraki.ac.jp

² 九州大学大学院人間環境学研究所

³ ミネソタ大学発達心理学研究科

⁴ 東京大学教育学研究科

⁵ 日本学術振興会特別研究員

の整合一貫性によって把捉される。つまり、分離などの危機的状況でも苦痛を表出せず、愛着対象に対して回避的態度をとり続ける、近接可能性が一般的に低い子どもをA型(回避型)、分離後の再会などにおいてネガティブな情動が低減されて然るべき事態でも不安がおさまらず愛着対象に怒りをぶつけてしまう、情動の両価性が高い(整合一貫性の低い)子どもをC型(アンビバレント型)、そして、愛着対象への近接可能性が高く、その対象に対する情緒的態度に整合一貫した特徴が認められる子どもをB型(安定型)に、それぞれ振り分ける(Ainsworthら, 1978)。こうしたSSPの基本原則は、AAIの中にもそのまま活かされているが、AAIにおける愛着対象は、“現にその場に居合わせる愛着対象”ではなく、種々の質問を通して潜在的に活性化される“記憶表象としての愛着対象”である。AAIでは、愛着経験を想起することができるか(記憶表象に対する近接可能性)、それら愛着経験(活性化された記憶表象としての愛着対象)に関して整合一貫した語りを構成することができるか(語りの整合一貫性)という2つの次元の程度が符号化・分類にあたって重視される(Hesse, 1999)。

Mainらは、AAI中の語りの特質を探る上で、Grice(1975)の会話の公準(質・量・関連性・様式)に依拠しながら、上記の2次元を基準に4つのタイプに振り分ける分類枠を提示している。F型(安定・自律型, Secure/autonomous) : Griceの4公準すべてに違反せず、正負両面の愛着経験を容易に想起し、語りに高い整合一貫性が認められるタイプ。愛着関係の人生に対する重要性を高く認識している。Ds型(愛着軽視型, Dismissing) : 主に質の公準(真実性および根拠の提示)に違反し、面接者に対して非協力的で過去の記憶を想起しようとしなかったり、愛着対象を過度に理想化する一方でその具体的な根拠をほとんど示さないタイプ(例、親はとても優しくかったと言いながら、その根拠となる具体的エピソードをほとんど思い出さない)。愛着の重要性を低く認識している。E型(とらわれ型, Preoccupied) : 量(完全でありながら簡潔であること)、関連性(問いに対して適切であること)、様式(明瞭で秩序だっていること)の公準に違反し、語り全般の整合一貫性が低いタイプ。語った内容にとらわれてしまい、情動を制御しきれずに、愛着対象への激しい怒りや恐れなどを表出したりする。U型(未解決型, Unresolved) : 分離や死別、虐待等に関して選択的にメタ認知が作動せず、語りに非現実的な内容が入り交じり、整合一貫性が著しく損なわれるタイプ(例、死んでいるはずの人が今なお生きているかのように語る)。過去の外傷体験にいまだに葛藤した感情を抱き、心理的に解決しきれていない。

理論的に、AAIにおけるF, Ds, Eは順にSSPにおけるB, A, Cに対応するとされ、また、Uは、近年、乳児の愛着研究で着目されている第4の愛着タイプ、D型(無秩序/無方向型, disorganized/disoriented : 近接したいのか回避したいのかどっちつかずの状態が長く遷延したり、場違いな行動、突然のすくみ、愛着対象に対するおびえなど、不可解な特徴が多々見られる, Main & Solomon, 1990)との関連性が仮定されている(Ainsworth & Eichberg, 1991 ; Main & Hesse, 1990)。

こうしたAAIは、先述したBowlbyの、IWMは相対的に高い時間的連続性を有し、愛着の質は生涯存続するという基本的仮定を、実証することを可能にしたと言える。現に、欧米圏を中心に行われている複数の縦断的研究は今や成人期に及び、その内のいくつか(Hamilton, 1995 ; Watersら, in press)は、同一人物の乳児期のSSP分類と成人期のAAI分類に理論的に想定される通りの対応性を認めている(一世代内の連続性)。しかし、少なくともこれまでのところ、AAIによって最も飛躍的に研究が進んだと言えるのは、養育者のIWMと子の愛着との連続性、いわゆる愛着の世代間伝達の問題であろう。この問題は、愛着の生涯発達に関する仮定と無関係ではない。BowlbyがIWMの影響が及ぶと考えた対人関係の中には、自らが養育者になった際の自身と子との関係も含まれるからである。つまり、自らの幼児期の愛着経験が、親になった際の養育行動の質を決めたり、そのため子は親自身の過去とほぼ等質の愛着スタイルを身につけると考えていたようである。ただし、厳密な意味でAAIが可能にしたのは、こうした過去が世代を超えて現在を規定するという意味の世代間伝達ではなく、現在の親のIWMが子の愛着にどのような影響を及ぼすのかという意味での世代間伝達である。

van IJzendoorn(1995)がそれまでの18研究(総計854組の親子)をメタ分析したが、親のAAIと子のSSPの間には、2分類間(AAIのFとそれ以外とSSPのBとそれ以外)で74%、3分類間(AAIのUおよびSSPのDを設定せずに分類)で70%、4分類間で63%の一致が認められた。親の愛着表象が親の子に対する敏感な応答性を介して、子の愛着に影響するという因果パスも、部分的にはあるが確かめられている。これ以降の研究でも同様の傾向を認めており(Hesse, 1999)、理論的に想定される通り、高い確率で、F型の親がB型の子を、Ds型の親がA型の子を、E型の親がC型の子を、U型の親がD型の子を持ちやすいと言えよう。

ただし、これまでの研究は、愛着の世代間伝達を、

ほとんどの場合、親の AAI 分類と子の SSP 分類の関連を問うという形で明らかにしてきたが、子どもの愛着の質は、その全てが SSP というストレスフルで危機的な実験状況に反映される訳ではなかろう (Waters & Deane, 1985)。親の愛着表象の子に対する影響を精緻に検討するためには、子の日常的状況における、親に対する“安全基地行動”(secure-base behavior)を広く問題にする必要がある。こうした課題は、唯一、Posoda ら (1995)によって検証されている。彼らは、子の日常的な愛着の質を測定する尺度として Attachment Q-set (以後 AQS: Waters & Deane, 1985)を用い、幼児の愛着の安定性とその親の AAI との関連性を吟味し、F型の親の子が他のタイプの親の子に比して、全般的に愛着の安定性が高いという傾向を見出している。

本研究は、基本的にこの Posoda らの研究をさらに発展させることを企図するものである。AQS は基本的に、SSP のように愛着を質的に分類するものではなく、一次元的に、その全般的安定性(security)を量的に表現する。しかし、子どもの愛着には様々な側面が存在することが想定され、それをいわば牽強附会的に一次元の特性値にすることは問題がない訳ではない。既に、幾人かの研究者が、AQS の項目をいくつかの下位領域に分割し、愛着の特質を多次元的に得点化する試みを行っている。実は、Posoda らも、愛着の全般的安定性の他に、相互作用の観点から4つの下位スケール(母親との円滑な相互作用・母親への近接・母親との身体接触・他の大人との相互作用)を設け、AAI との関連性を細かく検討している。今回、筆者らは、これら Posoda らの下位スケールに加えて、Teti (in press)が情動制御という観点から設定した下位スケールも用いることにする。本来、愛着の個人差は情動および情動制御の特質と密接に結びついていると考えられる (Magai & McFadden, 1995; Thompson, 1994) が、Teti の設定した情動の肯定的制御、情動の回避的制御、情動の制御不全という3下位スケールは順に SSP における B, A, C タイプの典型的な情動的特質を反映している。本研究は、こうした Posoda らと Teti による AQS の下位スケールを併せて用いることにより、より精細に、親の愛着表象と子の愛着行動との関連を検討することを目的とする。そして、AAI を用いた体系的な研究としては日本で初めてのものであり、AAI という方法の通文化的妥当性および愛着の世代間伝達という現象の通文化的普遍性を検証する上でも、非欧米圏での研究は必須のものだといえよう。

方 法

調査対象

研究協力者は、東京とその近郊に居住する50組の母子であり、子どもの年齢は2歳0カ月から4歳7カ月(平均3歳4カ月)に、母親の年齢は24歳から40歳(平均33歳)に分布していた。子どもの性別は、女児30名(60%)、男児20名(40%)であった。出生順位は、第1子が37名(74%)、第2子が11名(22%)、第3子、第4子がそれぞれ1名(各2%)であった。

母親の学歴は、中学校卒1名(2%)、高校卒12名(24%)、専門学校卒4名(8%)、短大卒16名(32%)、大学卒16名(32%)、大学院卒1名(2%)となっていた。これらの家庭は、夫婦と子どもの核家族が43名(86%)、夫方の祖父母と同居している家族が4名(8%)で、残りの3名(6%)は無記入であった。また有職の母親は13名(26%)で、内訳は常勤者5名(10%)、非常勤・不定期・パート5名(10%)、職種なし3名(6%)であった。無就労の母親は37名(74%)であった。

手続き

研究協力者は、幼稚園、保育園などでの呼びかけや新聞などに載せた募集の知らせなどを通して募った。興味を示した協力者に対して、この研究の目的と概略を説明し、家庭訪問の日程を決定した。各母子について、1, 2回の家庭訪問をし、母親に対して約1時間前後にわたり成人愛着面接(AAI)を実施し、その後、愛着Qセット法(AQS)のために母子相互作用の観察を2時間程度行った。AAIは母親自身の生育史に踏み込んだ、私的な内容が絡むものであるため、面接後のフォローも必要と考え、協力者全員にフィードバックシートを配布することにした。AAIを受けた事後感想などを記入することを求めた他、AAI後に何らかの不安を感じたり、AAIに限らず何か私的な相談がある場合は、その旨を記して返送してくれるよう依頼し、後日、研究者側から電話をかけ相談に応じた。

測定法

成人愛着面接：Adult Attachment Interview (AAI)

この面接では、約45分から1時間半ほどの時間で、自分の生育過程における愛着経験についての回想や、それに対する現在の評価などを聴取する (George et al, 1996)。日本語に翻訳されたインタビュープロトコルを用いて (数井・田中, 1998)、協力者は、①両親(またはそれに代わる養育者)との幼少期・児童期における関係の概略、②そうした関係の性質を最もよく表わす5つの言葉の提示、③その言葉の根拠となる具体的な思い出、

④養育者からの拒絶, 病気やけがをした際の養育者の対応, ⑤別離, 喪失, 虐待などの経験, ⑥幼少・児童期に比べて, 青年・成人期での両親との関係における変化, 両親の自分への関わり方の性質, ⑦現在の自分のパーソナリティや子育てに対する養育経験の影響の有無などについて尋ねられる。

インタビューは協力者の許可を得て録音され, その後, 逐語的にトランスクリプトに書き起こされたが, 文中に出てくる個人識別可能な具体的人物名や場所名はすべて除かれ, 代わりに記号が付された。

トランスクリプトは, Mainらのコーディング・マニュアルに厳密に従う形で分析された。具体的には, **自分自身の過去の愛着経験** (養育者等から愛された経験, 拒絶された経験, 情動的に巻き込まれた経験・役割逆転, 放任・無視・遺棄された経験, 達成への心理的圧力を受けた経験, それぞれの度合い) と **その愛着に対する現在の心的状態** (トランスクリプトに見られる談話の一貫性, 信憑性, 情報の量的適切さ, 語り方の自然さ, 各親に対する理想化, 想起不能状態, 現在も愛着にとらわれている結果生じる怒り, 養育者等に対する侮蔑, 語りの消極性, 子どもを死で失う恐怖, それぞれの度合い) の両側面から細かく検討された。

トランスクリプトの分類に関しては, MainとHesseによって1996年7・8月にミネアポリスで催された研修に参加し, かつ, AAI分類の信頼性テストに合格し, AAIの正式コーダーの資格を有する数井と田中が担当した。21ケース(全協力者の42%)のトランスクリプトを基に計算されたこの2者間の一致率は, 3分類では81%($kappa=.69, p<.001$), また, 4分類では76%($kappa=.64, p<.001$)であった(なお, ここで一致しなかったケースについては, 2者間で合議の上, 決定がなされた)。最終的に, 3分類では, F型が34名(68%), Ds型が12名(24%), E型が4名(8%)であり, 4分類ではF型が33名(66%), Ds型が10名(20%), E型が3名(6%), U型が4名(8%)となった⁶。この分類比率は, メタ分析を通じて明らかにされた欧米のデータ(F型55%, Ds型16%, E型8%, U型19%)と若干のずれを示しており(van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg, 1996), 本データではF型が相対的に多く, 特にU型の比率が低くなっていた。

愛着Qセット法: Attachment Q-Set (AQS)

子どもの愛着状態を測定するために, AQS(Waters & Deane, 1985)を用いた。多年にわたりAQS使用の経験を有する数井が, 観察に行く助手全員を数井との間での一致率が75%以上になるようにトレーニングした。そして, この中から1, 2名が各家庭を訪問し, 母親には通常その時間帯に行うルーティンをいつも通りに

進めてもらうように依頼した上で, 母子の日常場面を約2時間程度観察した。手順として, ①最初の20分で, 観察についての簡単な話し合いをしつつ, 見知らぬ他者である観察者へのその被験児の反応などを観察する。②その家庭がその時間帯に行っていること, 例えば公園に行く, 買い物に行くということをいつもと同じように進めてもらい, 観察者も同伴しながら, 子どもが母親を安全基地として使う様子などを中心に観察しメモをとっていく。③観察が終わりに近づいた時点で, その時間帯に観察されなかったこと(例, 友人や祖父母, 父親に預けられると泣かずにいることができるかどうか)について母親に尋ねておく。④家庭訪問を終了した後, この観察をもとに観察者は各自でAQSのカード仕分けを行う。

この方法では, 全90枚のカードを逐一, 「1:全くあてはまらない」から「9:とてもあてはまる」までの9段階のいずれかに分配し, 最終的にすべてのカードを1から9の段階それぞれに10枚ずつ割り当てる。割り振られた項目1つ1つに, その段階の値を付与する。例えば, 項目2の「遊びの後, お母さんの方へ戻ってきた時, 理由もないのにぐずぐず言うことがある」について, 被観察児の行動がそれに際立って該当するならば, そのカードは第9の段階に置かれるが, この場合, この被観察児における項目2の値は9になる。AQSの日本人に対する適用については, 愛着理論が予測する変数との関連が理論に沿った方向で相関していることが報告されるなど(e.g., 数井・無藤・園田, 1996; 近藤, 1993; Nakagawaら, 1992; Vereijken, 1995), 妥当性が認められている。

各子どもの愛着安定性の得点は, Watersら(1995)に

⁶ 欧米におけるAAIを使った20研究(van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg, 1996)の被験者数を見てみると, 21名の研究から100名の研究まであり, 1研究あたりの平均被験者数は43.5名になっている。そのため, 本研究における被験者の数はその基準を満たしていると考えられる。

また, F型以外の各型における分布が少ないがために, それらがその類型を代表しているのかという疑問もあろう。ただ, 少数であっても, 質問紙尺度のような得点ではないことと, 面接内容を逐語でトランスクリプト(1ページ2000字で, 14ページから38ページに及ぶ)に書き起こし, 1人の被験者に対し, 十数時間をかけて緻密に分析・分類する方法をとっていることなどによって, 少ない分布でもある程度, その型を代表しうると考えられる。しかし, 統計的判断からすれば, 必ずしも最適の分析ではないかもしれないが, 今回は, 本研究がAAIを日本人サンプルに適用した初めての体系的調査報告であるということを重く見, あえて, 欧米で一般的に用いられている枠組み, すなわち4類型による分析を貫くことに意義があると考えた。

よる“基準的配置”の各カードの得点と各被観察児の現実の配置(各項目の現実の値)の相関を求め、それに Fisher *r*-to-*z* 変換を施した数値である。今回の AQS 安定性得点の平均値は .40 (範囲: -.51 から .88) で、この得点と子の性別、子の年齢、子の出生順位との関連は認められなかった。

子どもの相互作用の行動特徴と情動的特徴の尺度

AQS の項目を複数組み合わせることで、子どもの相互作用上の行動的特徴を表わす 4 下位尺度 (Posoda ら, 1995) と情動的特徴を表わす 3 下位尺度 (Teti, in press) を作成した。

相互作用上の行動的特徴については、Posoda らの方法から、以下 4 領域について AQS を基に尺度を構成した (各尺度の内的一貫性を Standardized Cornbach's α で示した)。

- ①母親との円滑な相互作用(17 項目, $\alpha=.93$): 主に母親と関わろうとする際の容易さ、相互作用の円滑さ、従順さの程度を表わす (例「お母さんと物を分け合ったり、お母さんが頼むと物を渡したりする」)。
- ②母親への近接性(13 項目, $\alpha=.85$): 母親のところに適宜戻ったり、近接関係を維持しようとするか、母親の動きに気を配っているか、退屈したり、機嫌が悪くなった際に母親に近接しようとするかなどの程度を表わす (例「お母さんが求めたり、身振りで促したりしなくても、自分からお母さんに抱きついたり、甘えたりする」)。
- ③母親との身体接触度(7 項目, $\alpha=.63$): 身体的な接触を喜んだり、それによって安堵した様子を示す程度を表わす (例「お母さんの膝の上でくつろぐのが好きである」)。
- ④養育者以外の大人との相互作用(13 項目, $\alpha=.82$): 訪問者に対して自ら進んで関わろうとしたり、母親に促された際に大人と容易に相互作用する程度などを表わす (例「誰に対してもすぐ笑ったりほほえんだりする」)。

情動的特徴については、Teti の枠組みに従い、以下の 3 領域で尺度化を行った。

- ①情動の肯定的制御(3 項目, $\alpha=.88$): 情動を全般的にポジティブな方向に調整・制御可能であるかどうかを問題にする (例「機嫌がいいときには一日中その状態であることが多い」)。
- ②情動の回避的制御(4 項目, $\alpha=.66$): 身体的接触を避けるなど、対人的相互作用から派生する情動を回避的な方法で処理しようとする程度を示す (例「危なそうに見えたり、怖そうに見えたとお母さんの表情を見て、どうしたらいいか状況判断をする」の逆転得点)。
- ③情動の制御不全(4 項目, $\alpha=.74$): ネガティブな情動に対する制御が全般的に困難である程度を表わす (例「お母さんに対してすぐ腹をたてる」)。

結果と考察

母親の AAI 分類と子どもの AQS 得点との関連性

母親の愛着表象の質と子の愛着行動の全般的安定性との関連を、AAI 分類と AQS 得点との数量的関連を、母親の AAI の結果を安定型(3 分類における F)と不安定型(3 分類における Ds と E)の 2 群に分け、群間に AQS 得点の差が存在するかどうかで検証した。その結果、安定型母親の子どもは、不安定型母親の子どもよりも、AQS 得点が有意に高かった ($t=5.21, p<.001$) (TABLE 1)。

TABLE 1 母親の AAI における 2 分類別でみた子どもの AQS 安定性得点

母親の AAI 分類	子どもの AQS 安定性得点		
	n	平均値	SD
安定型(F)	34	.54	.21
不安定型(Ds, E)	16	.11	.37

$t=5.21, df=48, p<.001$

次に、4 類型による母親の AAI 分類 (F, Ds, E, U) を独立変数とし、子の AQS 得点を従属変数とする一元配置の分散分析を行った。その結果、AAI 分類の AQS 得点に対する有意な主効果が認められ ($F=13.69, p<.001$) (TABLE 2)、事後検定では、F 型母親の子の AQS 得点が高群の母親の子の得点よりも有意に高く、反対に U 型母親の子の AQS 得点が他群の子の得点よりも有意に低かった。なお、Ds 型と E 型の母親を持つ子どもの間に、有意差は認められなかった。

TABLE 2 母親の AAI における 4 分類別でみた子どもの AQS 安定性得点

母親の AAI 分類	子どもの AQS 安定性得点			
	n	平均値	SD	F-test
安定型(F) ^{abc}	33	.54	.22	$p<.001$
愛着軽視型(Ds) ^{ad}	10	.25	.27	
とらわれ型(E) ^{be}	3	.23	.25	
未解決型(U) ^{cde}	4	-.25	.49	

注: abcde の同じアルファベット同士の組み合わせが LSD 法による事後検定で有意差あり。

親の愛着表象が安定したものである場合、その子どもの愛着も全般的に安定したものになりやすいということが窺え、AAI に反映される母親の愛着表象の安定／不安定の差異が、日常的場面での子どもの安全基地行動の性質をある程度、予測するということが明らかになった。この結果は、養育者の IWM が子の愛着形成にいかに関わるかという愛着の世代間伝達の問題に対して、非欧米圏において、その連続性を初めて実証的に支持したことを意味し、その点で、世代間伝達とい

う現象の通文化的普遍性に、一定の証左を付与し得たと考えられる。また、成人のIWMの測定法としてAAIが、ある程度、通文化的妥当性を有するということに対しても一定の支持を与え得たと言えよう。

母親のAAI分類と子のAQS下位尺度との関連性

日常的状況における子の親に対する安全基地行動を中心に、子の愛着の特質を多次的に数量化し、それらと母親の愛着表象の質との関連性を検討した。具体的には、AQS項目から抜粋して作成した、相互作用上の行動的特徴に関わる4下位尺度および情動的特性に関わる3下位尺度、それぞれの合計点を各項目数で除した平均値(値が高い方がその特性の程度が高いことを示す)を分析に用い、それらとAAIの2類型間の相異について検証した(TABLE 3)。

TABLE 3 母親のAAIにおける安定型・不安定型の2分類を基準にした、子どものAQS尺度の比較

AQSの下位尺度	母親のAAI				t	df	p
	安定型(F) ^a		不安定型(Ds, E) ^b				
	平均	SD	平均	SD			
行動特徴							
母親との円滑な相互作用	6.9	.82	5.0	1.7	5.48	48	.001
母親への近接性	5.7	1.2	4.6	1.3	3.00	48	.005
母親との身体接触	5.4	1.2	4.7	1.2	1.89	48	.10
養育者以外の大人との相互作用	6.3	.87	5.7	1.6	1.83	48	.10
情動特徴							
情動の肯定的制御	7.7	.99	5.5	2.5	4.48	48	.001
情動の回避的制御	3.9	1.5	4.7	1.9	-1.67	48	.101
情動の制御不全	2.7	1.0	4.5	1.8	-4.57	48	.001

^a: n=34, ^b: n=16

安定型(3類型におけるF)の母親の子とそれ以外の不安定型の母親(DsとE)の子という2群間での比較で、「母親との円滑な相互作用」と「母親への近接性」の2下位尺度において、安定型母親の子の方が不安定型母親の子よりも値が有意に高かった。「母親との身体接触」と「養育者以外の大人との相互作用」でも、安定型母親の子が不安定型母親の子よりも得点が高い傾向にあった。情動制御の側面では、安定型母親の子が、不安定型母親の子よりも、有意に、情動の肯定的制御の度合いが高く、情動の制御不全の程度が低い(ネガティブな情動に支配されにくい)ことが認められた。

次に、4類型による母親のAAI分類を独立変数とし、AQSの7下位尺度を従属変数とする一元配置の分散分析を逐一行った。TABLE 4に示したように、相互作用上の行動的特徴は、「母親との円滑な相互作用」($F=12.32, p<.001$), 「母親への近接性」($F=3.60, p<.05$), 「養育者以外の大人との相互作用」($F=2.90, p<.05$)においてAAI分類の有意な主効果が見出され、「母親との

TABLE 4 母親AAI 4分類別、子どもの各尺度得点

行動特徴	AQS尺度	子どもの尺度得点		
		平均値	SD	F-test
行動特徴	母親との円滑な相互作用			
	安定型(F) ^{ab}	6.9	.83	12.32
	愛着軽視型(Ds) ^{ac}	5.4	1.4	$p<.001$
	とらわれ型(E) ^d	5.7	1.6	
	未解決型(U) ^{bcd}	3.7	2.2	
	母親への近接性			
	安定型(F) ^{ab}	5.6	1.2	3.60
	愛着軽視型(Ds)	5.1	1.2	$p<.05$
	とらわれ型(E) ^a	4.1	.71	
	未解決型(U) ^b	4.0	1.5	
	母親との身体接触			
	安定型(F) ^a	5.4	1.2	2.80
	愛着軽視型(Ds) ^b	5.3	1.1	$p<.10$
	とらわれ型(E)	4.4	.14	
	未解決型(U) ^{ab}	3.8	1.4	
	養育者以外の大人との相互作用			
安定型(F) ^a	6.3	.87	2.90	
愛着軽視型(Ds) ^b	6.0	1.4	$p<.05$	
とらわれ型(E) ^c	6.5	.16		
未解決型(U) ^{abc}	4.6	2.1		
情動特徴	情動の肯定的制御			
	安定型(F) ^{ab}	7.7	.97	10.60
	愛着軽視型(Ds) ^{ac}	6.1	1.7	$p<.001$
	とらわれ型(E) ^d	6.2	3.7	
	未解決型(U) ^{bcd}	3.7	2.3	
	情動の回避的制御			
	安定型(F) ^a	3.9	1.4	3.10
	愛着軽視型(Ds) ^b	3.8	1.6	$p<.05$
	とらわれ型(E)	5.0	.73	
	未解決型(U) ^{ab}	6.1	2.4	
	情動の制御不全			
	安定型(F) ^{ab}	2.7	1.0	8.45
	愛着軽視型(Ds) ^{ac}	4.1	1.8	$p<.001$
	とらわれ型(E)	3.8	.83	
	未解決型(U) ^{bc}	5.7	2.0	

安定型(F): n=33 愛着軽視型(Ds): n=10; とらわれ型(E): n=3; 未解決型(U): n=4

注: abcdの同じアルファベット同士の組み合わせがLSD法による事後検定で有意差あり。

身体接触」においても($F=2.80, p<.10$) 関与の傾向が認められた。事後検定から、どの下位尺度においても、F型母親の子の得点が高かった。反対に、U型母親の子の得点は低く、この子らは、母親とのやりとり、母親への近接・接触の度合いが極端に低く、養育者以外の大人との相互作用も少ないようであった。ただし、Ds型とE型の母親の子どもの間には有意差が認められなかった。

情動制御に関しては、「情動の肯定的制御」($F=10.60, p<.001$), 「情動の回避的制御」($F=3.10, p<.05$), 「情動の制御不全」($F=8.45, p<.001$)の3下位尺度すべてにおいて、AAI分類の有意な主効果が認められた。事後検定により、母親がF型である子どもは、Ds型やE型の母

親の子どもよりも「情動の肯定的制御」の得点が有意に高かったが、U型母親の子は他群の子に比してこの度合いが低かった。「情動の回避的制御」、つまり情動制御を対人的なやりとりを回避することで行う傾向については、U型母親の子が、F型とDs型の母親の子よりも、その程度が有意に高かった。「情動の制御不全」、すなわちネガティブな情動がいったん生起するとそれを制御することが困難になる性質についても、U型母親の子がF型とDs型の母親の子よりもその度合いが有意に高いことがわかった。

以上の結果で、F型母親を持つ幼児は、相互作用と情動制御の両側面において、きわめて安定し一貫した特質を示した。F型母親の幼児は、母親との間で円滑なやりとりを行い、必要に応じて母親に近接・接触し得る上に、母親以外の大人とも適度に相互作用することができ、情動を全般的にポジティブに維持することが可能であった。これは、欧米圏でその妥当性が検証されている(Thompson, 1999) B型の子どもの諸特質を如実に反映している。世代間伝達仮説との関わりで言えば、F型の母親がB型の子どもを持ちやすいという仮定が、日常の安全基地行動を問題にした本研究を通じて、支持されたと言えるだろう。

一方、U型母親の幼児は、相対的に、母親との間で円滑に相互作用することができず、情動をポジティブな方向に調整することが困難で制御不全に陥りがちであったことから、日常場面において母親を安全基地としてうまく利用できていないことが窺えた。AAIとSSPの関連を見た研究では、U型の母親がD型の子どもをかなり高い確率で持ちやすいことが明らかにされている(van IJzendoorn, 1995)が、この結果は、こうしたD型の子どもの諸特質にかなりのところ整合するものと言える。

U型の母親の顕著な特徴として、よく“怯え/怯えさせる(frightened/frightening)”という特徴が挙げられる(Main & Hesse, 1990)が、こうした特徴は、子どもを常時、高い不安状態に置くことになるだろう。予測できない形で、突然、トラウマなどの記憶や思考にとらわれ、自ら怯え、不可解な行動を見せる母親は、結果的に子どもをひどく怯えさせることになる。本来、自らが怯え危機を感受した際に、近接や安心感を求めていく対象こそが母親だろうが、この場合、その母親が同時にその危機を与える当事者でもあり、子どもは回避も近接もままならない本質的な葛藤状態に置かれる。その結果、子どもは、“組織化されない”あるいは“方向性の定まらない”行動パターンを持ちやすい。こう

したメカニズムを間接的に裏付けるという意味でも、今回、養育者の存在が確保され、本来、子どもにとって必ずしもストレスフルではないはずの日常状況において、なお、U型の母親の子どもにD型の子どもの特徴が多く見出されたことは刮目に値するのではないだろうか。

Ds型とE型の母親の子どもに関しては、愛着の全般的安定性でも、AQSを多次元化した相互作用および情動制御の尺度でも、両者間に特質的な差は見出せなかった。両者は、F型の母親の子どもほどには安全基地行動が取れず、また情動をポジティブに維持することができないものの、U型の母親の子どもからするとまだ、相互作用の上でも情動制御の上でも行動の整合性や組織化の程度が比較的高く保たれているという特徴を示すものであった。今回、各類型のばらつきに偏りがあり、特にE型に該当する母親が3名と少なかったことが、分析結果に少なからず影響をもたらしたのかもしれない。さらに、AQSそのものの性質に関わる、より根本的な課題として、AQSがA型とC型の子どもの弁別にあまり適していないという可能性がある(Pederson & Moran, 1995)。愛着とは、個体が危機的状況に接したり、潜在的危機を察知し、恐れ等のネガティブな情動を経験した際に、最も活性化されやすい(Bowlby, 1969, 1973, 1980)。そして、その個人差とは、この近接関係の維持方略、ネガティブな情動に対する制御・対処方略の差異として特徴づけられる(Ainsworthら, 1978)。しかし、ここでは養育者が常に存在し、近接関係が脅かされない状況であったため、情動表出を最小限に押さえ込むというA型の特徴、逆に情動表出を最大限に行うというC型の特徴という方略の本質的な差異が顕在化してこなかった可能性もあるだろう。

全体的考察

本研究では、母親の愛着表象の質をAAIを通して、子どもの、特に安全基地行動に関わる愛着の安定性をAQSを用いて測定し、両者の関連性を検討した。日本人サンプルにおいて、こうした問題を扱った研究は未だ公開されておらず、本研究が最初の結果報告となる。

欧米と比較して、AAIにおける母親の語りの特徴でF型が比較的多く、U型が比較的少ないという結果を得た。U型の語りについて、日本では死者に対しては、お盆や法事といった行事が葬式に引き続き存在するが、そのような宗教的な行事がほとんど催されないキリスト教を中心とした欧米の文化との差異が関連しているのではないかと考えられる。欧米では、「亡くなったお

じいちゃんがお盆に戻ってきている」という表現などはU型に分類される可能性が高いが、日本的な範疇で捉えれば、これは死者に対して未だにとらわれている心的状態とは言い難い。そのため、今回、日本の文化・宗教的な背景を厳密に検討しつつ、より明白にU型の語りの特徴を示しているトランスクリプトにU型の分類を与えた、つまり、U型に対する判断基準を比較的厳しくしたゆえに、U型分類が欧米よりも少なくなった側面があるのではないかと考える。

最後に本研究が抱えている問題と今後の課題についてふれておく。1つ目には、今回使用したAAIとAQSという測度が、個人的特性をどれだけ真に反映し得ているかという問題がある。AAIの信頼性・妥当性の問題は、欧米圏に限って言えばその方法としての確実性がほぼ裏付けられている(Crowellら, 1996; van IJzendoorn, 1995)。今後、日本内部でもAAIの信頼性・妥当性に関して独自に検討を進めていく必要があるだろう。AQSについても、そこでの子どもの特質が、子どもの日常の一般的特徴を十分に反映しているかについては、他の愛着関連の測度を併用したり、観察を複数回に分けて行うなどして、今後とも検討を続けていく必要がある。

2つ目は理論的により本質的なものであるが、子どもの愛着形成に母親の愛着表象のみを据えて考えることが妥当かという問題である。日本では最近の育児が「母子密室育児」と問題になってはいるものの、欧米、特にアメリカに比べれば、育児システムの中で原家族の実父母や親戚縁者が何かと関与する程度が高いと考えられる。里帰り出産や何かあれば祖母が駆けつけるなど、実家との関係が濃密な場合も少なくない。欧米ほど、父母子という家族ユニットが確立したのではなく、潜在的に育児に家族外の他者の影響が入り込みやすい文化的状況が日本にはあるだろう(Shwalb & Shwalb, 1997)。そのため、父親はもちろん、祖父母等の他のソーシャライザーによる直接的影響、および母親を取り巻く夫婦関係や社会的支援などによる間接的影響などにも実証的関心を積極的に向けていくことは、日本において特に検討されるべきだと思われる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of Attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Ainsworth, M.D.S., & Eichberg, C.G. 1991 Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure or other traumatic experiences. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. London: Routledge. Pp.160—183.
- Bowlby, J. 1969/1982 *Attachment and loss: Vol. 1 Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol. 2. Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss: Vol. 3. Loss*. New York: Basic Books.
- Crowell, J. A., Waters, E., Treboux, D., O'Conner, E., Colon-Downs, C., Feider, O., Golby, B., & Posoda, G. 1996 Discriminant validity of the Adult Attachment Interview. *Child Development*, **67**, 2584—2599.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象——愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観—— 心理学評論, **35**, 201—233.
- 遠藤利彦 1993 内的作業モデルと愛着パターンの世代間伝達 東京大学教育学部紀要, **32**, 203—220.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1996 *Adult Attachment Interview Protocol* (3rd ed.). Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- Grice, P. 1975 Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Moran (Eds.), *Syntax and semantics: Vol. 3 Speech acts*. New York: Academic Press. Pp.41—58.
- Hamilton, C. E. 1995 *Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence*. Paper presented at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Indianapolis.
- Hesse, E. 1999 The adult attachment interview. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment*. New York: Guilford Press. Pp. 395—433.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, **7**, 31—40.
- 数井みゆき・田中亜希子 1998 Adult Attachment Interview 成人愛着面接インタビュープロトコル日本語翻訳版(第2版). 非出版文献, 茨城大学

教育学部

- 近藤清美 1993 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定 発達心理学研究, 4, 108—116.
- Magai, C., & McFadden, S. 1995 *The role of emotion in social and personality development*. New York : Plenum Press.
- Main, M., & Goldwyn, R. 1998 *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- Main, M., & Hesse, E. 1990 Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status : Is frightened and/or frightening parental behavior the linking mechanism ? In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years : Theory, research, and intervention*. Chicago: University of Chicago Press. Pp.161—182.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research*. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (1—2, Serial No.209), 66—106.
- Main, M., & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years : Theory, research, and intervention*. Chicago : University of Chicago Press. Pp.121—160.
- Nakagawa, M., Teti, D. M., & Lamb, M.E. 1992 An ecological study of child-mother attachments among Japanese sojourners in the United States. *Developmental Psychology*, 28, 584—692.
- Pederson, D.R., & Moran, G. 1995 A categorical description of infant-mother relationships in the home and its relation to Q-sort measures of infant-mother interaction. In E. Waters, B.E. Vaughn, G. Posoda, & K. Kondo-Ikemura (Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models*. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 60 (2—3, Serial No. 244), 111—132.
- Posoda, G., Waters, E., Crowell, J. A., & Lay, K.-L. 1995 Is it easier to use a secure mother as a secure base? Attachment Q-sort correlates of the Adult Attachment Interview. In E. Waters, B.E. Vaughn, G. Posoda, & K. Kondo-Ikemura (Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models*. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 60 (2—3, Serial No.244), 133—145.
- Shwalb, D. W., & Shwalb, B. J. 1997 *Japanese childrearing : Two generations of scholarship*. New York : Guilford Press.
- Teti, L. The attachment Q-sort as an index of emotion regulation in preschool-aged children. In E. Waters, B. E. Vaughn, G. Posoda, & D. Teti (Eds.), *Patterns of secure base behavior : Q-sort perspectives on attachment and caregiving in infancy and childhood*. Mahwah, NJ : Erlbaum. (in press).
- Thompson, R, A. 1994 Emotion regulation : A theme in search of a definition. In N.A. Fox (Ed.), *The development of emotion regulation : Biological and behavioral considerations*. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 59 (2—3, Serial No.240), 25—52.
- Thompson, R, A. 1999 Early attachment and later development. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment*. New York : Guilford Press. Pp.265—286.
- van IJzendoorn, M.H. 1995 Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment : A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, 117, 387—403.
- van IJzendoorn, M.H., & Bakermans-Kranenburg, M. 1996 Attachment representations in mothers, fathers, adolescents and clinical groups : A meta-analytic search for normative

- data. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**, 8—21.
- Vereijken, C. M. L. 1995 *The mother-infant relationship in Japan : Attachment, dependency, and amae*. Netherlands : Labyrint Publication.
- Waters, E., & Deane, K. E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q-sort methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50** (1—2, Serial No. 209), 41—65.
- Waters, E., Merrick, S. K., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. 2000. Attachment security in infancy and early adulthood : A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, **71**, 684—689.
- Waters, E., Vaughn, B.E., Posoda, G., & Kondo-Ikemura, K. 1995 Caregiving, cultural, and

cognitive perspectives on secure-base behavior and working models. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **60** (2—3, Serial No.244).

謝 辞

本論文の作成にあたり、データ集め並びにトランスクリプトの書き起こしという膨大な作業を快く手伝ってくださった、園田菜摘さん、宇佐美芳子さん、安治陽子さん、三原理恵さん、利根川智子さん、北村琴美さん、福田佳織さん、倉持清美さんに心より感謝いたします。そして、何より、この研究を可能にくださった50組のお母さんとお子さんに、心よりお礼申し上げます。そして、ニューヨーク州立大学の E.Waters 教授、カリフォルニア大学の M.Main 教授からの貴重なご助言・ご支持に深く感謝いたします。

なお、本研究は、第一著者に対する平成9・10年度科学研究費補助金(奨励研究A, 課題番号09710073)の助成をうけて行われました。

(1999.11.15 受稿, 2000.5.1 受理)

Intergenerational Transmission of Attachment : Japanese Mother-Child Dyads

MIYUKI KAZUJI (SCHOOL OF EDUCATION, IBARAKI UNIVERSITY), TOSHIHIKO ENDO (GRADUATE SCHOOL OF HUMAN-ENVIRONMENT STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY),
AKIKO TANAKA (INSTITUTE OF CHILD DEVELOPMENT, UNIVERSITY OF MINNESOTA), HIROKO SAKAGAMI (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, UNIVERSITY OF TOKYO) AND
MAKI SUGANUMA (POSTDOCTORAL FELLOW, JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE, TOKYO) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2000, 48, 323—332

The purpose of the present study was to examine intergenerational transmission of attachment between 50 Japanese mothers and their preschool-age children. The mothers' present state of mind with respect to attachment was assessed using the Adult Attachment Interview (AAI); their children's level of attachment security was measured using the Attachment Q-set (AQS). The results indicated that the children of secure mothers had the highest security scores on the AQS, while the children of unresolved mothers had the lowest AQS scores. Moreover, secure mothers' children were likely to interact positively with their mothers as well as with strangers, and their emotion regulation was positively organized. In contrast, the children of unresolved mothers acted negatively with their mothers and with strangers, and their behavior was disorganized. Children of dismissing and preoccupied mothers did not show marked differences. The present study is the first non-Western sample documenting empirically the association between the AAI and the AQS. Future research should ascertain the validity of the AAI and the AQS with Japanese samples, and should examine the role of familial/social influences on the development of attachment.

Key Words : intergenerational transmission of attachment, Adult Attachment Interview (AAI), Attachment Q-set (AQS), internal working model, attachment behavior